

THE ACCEPTANCE OF DEATH

by Charles Hartshorne

死をいかに受け入れるか

チャールズ・ハーツホーン

大塚 稔 訳

人間は死を免れることができない。だとすれば、生の意味を考えようとすれば、どうしても死の意味を考えざるを得なくなる。死が理解できなければ、生を理解することはできないし、その逆も然りである。生と死は、一つの実在の二つの側面に他ならない。

本来、生はそれが続いている限り良いものである。生の意味は、ある程度は少なくとも、生きていることそのこと自体が善だという点にある。普通は、誰しも生きていること自体に幸せを感じる。確かに、現状より生きていることが更に嬉しくなるような、そのような状況を想像することは可能ではあるが、それでも、生は、生を維持できなくなることに比べると、良いことではあるだろう。物事がうまく運ばない場合には、そもそも生きていること自体に何の満足感も得られないのだと、自分を誤魔化すことはできるだろうが、自分の不幸を公言してはばからない人でも、息をしたり食べたりすることの大切さは分かるはずだし、自分をどのように表現すればいいかを考えているときや、自分の悩みを他人に打ち明けて注意を引いたり、反応を見たりすることに何がしかの意味を見出すこともある。生きるというのは、基本的には自発的な行為であって、誰からも生きることを強要されることはない。ただしほとんど意識がない場合は別である。生きる意志がまったくなくなれば、事実上は死んだも同然である。自殺を考えている人間は、「もうこれでこの世からおさらばできる」という考えから何がしかの満足感を得ている。この満足感がある間は、まだ自殺志願者本人をこの世に留められるが、それも現実に生を終わらせるような物理的な行動が取られれば、終わりである。ただしその場合でも、弾丸や毒薬がその生を終わらせるのであって、死を決した意志がその生を直接終わらせるわけではない。生きようとする意志を持つことと、何もなくなるよりは生きていることの方が良いことだと認めることとは、同じことだと私は思う。

地獄に対する恐怖心があるために生き続けている人のことを考えて見よう。彼の生きる意志を支えているのは、「地獄に落ちるくらいなら今の方が良い。あえて地獄に落ちる必要はない。少なくともまだその必要はない」という想いであろう。このように考えて、彼は現在の生に何らかの価値を見出しているのであろう。あるいはまた、母親が子供たちを思って生きようとしている場合、子供たちの母親への想いや、子供たちが母親を支えているという想いが、母親自身の行動に何らかのささやかな満足感を生み出すこともあるだろう。

生きることは、確かに常にある程度は自発的な事柄だと言えるが、死ぬことは、選択できる場合もあれば、できない場合もある。なぜなら外的な力によって無理やり殺される場合もあるし、当人

がもう生きることを望まなくなる場合もあるからである。更に言えば、長くは生きれないことに満足感を抱いたり、個々人に課せられた人生の終末を越えてまで無理して生きたくないと思うこともあるだろう。またどうにも避けられない肉体の死という摂理に反してまで生きようとしなくて、老齢から来る死や末期疾患を受け入れることも可能である。

死を受け入れる方法には、主に三つの考え方がある。一つは、伝統的な意味での人格の不死性を信じようとする、あるいは信じる、つまり死後にも再び意識を持てると信じる。それは、深い眠りから覚めたときに似ているが、今度は、超自然的な天国や地獄で、あるいはまた他の惑星かどこかで別の動物となって意識を持てると信じる。この生には、以前、地球にいたことの記憶があるかもしれないし、ないかもしれないが、いずれにせよ、これは、明確に実証された科学上の証拠に訴えられるような見方ではない。このような主張は、どこであろうといつであろうと、おおよそ生命自体の本性を誤解した結果だと、私は考えている。

もう一つは、死は善いもの、少なくとも悪くはないものとする見方で、それは、夢を見ない眠りに落ちて二度と目覚めないことに喩えられる。つまり、死に至るまでには何らかの苦痛はあるかもしれないが、死んでしまえば何の苦痛もないという主張である。そう考えれば、生のもろもろの苦しみがきっぱり解放されることになる。ただしもはや苦しみが無いということは、もっぱら当事者以外の傍観者が見て「善い」と思えるにすぎない点には留意する必要がある。「私なんか死んだ方がいい」と結論づけて自殺しようとする者は、その方が良いかもしいし悪いかもしいし、どちらにしても大して変わらないかもしれない。当の自殺志願者は、良いとも、悪いとも、中立的とも言えるような、どのような状態にもないからである。自殺志願者本人には、生きて存続できる何の未来もない以上、自分の生だと言えるようななどのような死後の未来も存在しないだろう。自殺志願者は、死ぬ前の束の間の自己満足を得るためか、それとも後に残る人々のことを思ってか、そのいずれかによって死を選ぶに違いない。死を夢のない眠りに喩えることは、死に行く本人に、死が善いことだと納得させるには不十分だと私は思う。

死を甘受する第三の方法は、我々の最大の関心事を、利己主義の克服にあるとする考え方である。生きる価値は、我々を生かしてくれる人々のためにただひたすらに寄与することにあると考えられる場合、また我々の人生を超えた未来の生命に寄与することが、現在を生きる我々の人生に満足感の一端を与えようと思える場合、ただその場合にのみ、我々は死を積極的に受け入れられるのである。私はこのような理論を、「献身寄与」(contributionism)と呼んでいる。これには、もっぱら他の人々の利益になるためだけに自分の持っている技能を提供するという「技能提供」(service) —たとえば教員の私はその知識を活用して講演をするような場合—の意味も含まれるが、それ以上の含みがある。つまり私は、自分が個としての本来の自分であり続けるということだけで (we are in ourselves) 生命の未来に寄与していると言いたいのである。この献身寄与にとって必要不可欠なことは、現に今、我々が幸福感を抱いているという点にある。幸福感を抱いていない者は、たとえ有用な人材であっても、有用な人材であってかつ幸福感も抱いている者に比べると、それほど寄与しているとは言えない。後世の人々が振り返って、我々の時代の不幸しか眼に入らないとすれば、取り立てて役に立ったとは言えないだろう。人が思い出したいのは、喜びであって、苦しみではない。「もっとも甘美な歌は、悲劇のどん底を語る歌」だと詩人が言っている言葉に真理を認めるにせよ、それでもなおこのような歌を創り語るという点には、単に悲しみでは尽くせないものがある。つま

りその歌には、哀歎が美しく表現されているという点で、詩人には言い知れぬ満足感があるはずだからである。

死を人生の終焉として受け入れることは、生涯を有限なものないし限られたものと捉えることである。我々は空間と時間において有限である。確かに我々は、空間的にも時間的にも、単に実在の断片にすぎない。どのような芸術作品や美的なものも、同じように一つの断片でしかない。例外は、全時間を貫いて存在するこの宇宙だけである。死ぬ定めにあることに満足するということは、自分が行える寄与にも限りがあると納得しながら、それでも最大の関心を払って全体の生に寄与しようとするに他ならない。我々の生涯にも当然、最後の瞬間はあるだろうし、どのような書物にも最後の章はあるだろう。詩にもまた最後の一行はある。初めも終わりもないとすれば、どのような芸術作品にも明確な形態も意味もなくなるだろう。私個人としては、人生は、並みの幸運に恵まれて落ち度なく暮らせていれば、一つの芸術品に比せられる価値があるものだと思っている。終わりもなく存在し続ける理由などまったくないし、むしろ逆に、終わりがなくてはならないものだと考えている。

人生の面白さはおおよそ、始めがあり、中間があり、終わりがあるという点にある。幼児と青年、青年と熟年、熟年と老年の間には、対照的なまでに劇的な差異があるが、これらの差異は、その時々々の人生の目的や視野の限界などが合わさって生み出される。一体これ以上の何を望むというのだろうか。もし眠ることがまったく恐ろしいことでもないとするれば、目覚めない眠りが恐ろしいと考える理由はどこにもない。眠っている当人にとっては、目覚めないという事実は何もないことと同じだからである。眠っている者が目覚めないという事実を経験できるのは、当事者以外の人々だけである。

人々を困惑させているのは、おそらく、死ねば生命が完全になくなるという観念だろうが、私の死はもっぱら私に固有の生がもはや続かなくなるということであって、すべての生命が終わるわけではない。新たな生命が、その有限な生命を生き切ることで、全体としての生命の未来に寄与するのである。

献身寄与によって死の問題が解決されるためには、別の観点が必要になる。

- 1：今現在の自分たちの人生に満足するには、必ずしも自分自身の振舞いに未来永劫の褒賞が与えられると思う必要はない。当人にとっては、そもそも現に生きていること自体が褒賞なのである。我々が生きているのは、生きようと思って生きているのであって、生本来の褒賞は、まさしく今こうして現に生きていることの中にある。
- 2：この現在を満足するということに必要なことは、次の問いに何らかの返答を与えるだけである。つまり、「現在が過去となってしまった後で、幸せということにどのような意味があるのか。また、不幸だった、つまり思っていたほど幸せではなかったということが、なぜ大切なのか」という問いである。幸福や不幸は、過去になるとその価値を失うのだとすれば、人生は、無にすぎないとか、結局は無とならぬ区別がつかないものになるということに重要な意味があるのだろうか。かりに我々には、何の恩恵もなく不快にしか思えない人生であっても、他の何らかの生命が必ず存在して、我々の人生から益を受けたと感ずることはできるはずだ。「社会的な不死性」(social immortality) と呼ばれるものは、少なくとも、このような方向への第一歩を示唆している。

- 3 : しかしながら、人間社会でのみ通じる社会的な不死性というものは、人類という種の未来がどうなるかに左右されるし、また今現在の我々には幸福であったり善いことであったりすることが、未来の人類にどの程度重要な寄与となるのかどうかも定かではない。核戦争が起これば、寄与したくても世界には何も残らなくなるだろう。人類にはまったく破滅などありえないと言い切れる根拠は、どこにもない。人類を超えた何らかの生命体や厳密な意味での神的な生命体を信じることができる場合にのみ、つまり我々の生がその善さと魅力〈beauty〉に応じて寄与できるような生命体を信じることができる場合にのみ、我々の寄与は紛れもなく永遠に残されることになる。このような見方が、死に関する問いの根本的な問題を解決するものだと、私は考えている。このように考えてこそ、生の価値〈meaning〉はその最後を越えて生き続けることができるのである。
- 4 : 我々はすべて死を免れないという普遍的な事実は何らかの思いを抱くことと、人間には無数の死に方がある一生まれてすぐ死ぬ幼子もいれば、熟した柿のように落ちる者、苦しみぬいて死ぬ者、安らかに眠るように亡くなる者など一ことに考えをめぐらせることとは、決して同じことではない。この点について、二つのこと言っておきたい。一つは、ある程度は偶然に左右されるということ。もう一つは、処し方の善し悪しにも左右されざるを得ないということ、である。個人のいかなる知恵や努力によっても、どうしても防ぎ得なかった不運は存在するし、また通常ならあって当然の生活から、いきなり生存の機会を奪い取るような愚かで薄弱な決定が下されることもある。私は長年、一つの哲学を考え続けてきたが、その哲学では、世界には確かに大枠において予期可能な秩序は存在するとは言え、具体的に生起する出来事の数々は、まったくの偶然に左右されると見なされる。神にも、他のどのような被造物にも、私やあなたに起こることを正確に決めることができない。無数の被造物が寄り集まってそれを決定するのであって、どの被造物にも前もって何か決定されるかはまったく分からない。世界での神の役割は、被造物の活動を細部にわたって選択決定することではなく、被造物が自ら決定する際に、無秩序や衝突ができるだけ生じないようにある一定の制限を置くことなのである。

私は、不幸が生じたときに、なぜ神は私にそのような不幸をお与えになったかと問いたですことは、宗教的には大きな誤りだと強く確信している。神には、誰かに不幸をもたらそうとする働きなど存在しない。不幸をもたらすのは、神以外の被造物、たとえばバクテリアや強盗や誹謗中傷する者たちである。神は、宇宙的規模の秩序が存在することを可能にさせており、そのような秩序の中で、被造物は生存し、自ら決定を下しているのである。この秩序には、何らかの不運は付き物だが、特定の具体的な不運は神による決定ではなく、被造物による決定である。常にその決定には多くの被造物が渾然一体となって関わっている。つまり、どのような被造物の意図にも実現可能性があるため、具体的に何が、私やあなたにもたらされるかはまったく偶然に左右される。

人生には偶然が満ち溢れていることを否定する哲学者や神学者がいれば、ぜひ私に教えてほしい。もしそのような哲学者や神学者がいても、おそらく彼らには、具体的に存在する善や悪をどのように捉えればよいか説明できないだろう。そのような者たちは、神を信じているなら、悪の神学的な問題に適切に答える術を持たないだろうし、信じていないなら、無慈悲な非道徳的な事柄を必然的なこととして受け入れ、神学的な決定論が神に帰しているように、我々の苦しみに対してもぞっ

とするほどの無関心さで対応することになるであろう。多くのものが出て、多くの作用があって、それぞれが偶然に重なり合って生み出される。悪を受け入れる見方は、これしかない。

神学にかかわらない決定論者たちは、自分の意志がどうであれ、自動的に偶然性を標榜することになる。なぜなら決定論者が解釈する宇宙全体のシステムでは、あらゆる出来事は起こるべくして起こっており、それ自体に理由があって起こっているわけではないし、全体としては、途方もなく複雑なサイコロを投げたように、サイコロにもサイコロを振る者にも、まったく理性的な説明が行えないものと考えられる。偶然性はどこかになければならないが、偶然性が認められる場所はどこにもある。ちょうど何らかの秩序がどこにもあるように。量子力学ではこの二つの事柄がうまく結び付けられている。つまりランダムさと無数の同じようなランダムな出来事に一定の制限を与えれば（私はどのような制限にも神の摂理が働いていると考えている）、統計学的な規則性は得られるが、それぞれ単独の作因者にはほとんど自己決定権がなくなる。

ある現代の哲学者が、我々人間は余りにも裕福になりすぎて死ぬ定めにあることを放念していると語っている。1924年にその哲学者に会ったが、私は、はるか以前に、この問題に思いを巡らせていた。先のことは、種々ある理由の一つであって、唯一の理由というわけではなかった。以来、決して変わることなく私の結論として堅固に抱き続けてきた確信は、自分本位の考え方〈self-interest〉は、たとえそれがどれほど「思慮分別のあるもの」であっても、決して何かをなす動機付けには相応しくないという信念である。我々が生きている限りは、他人が我々の幸福に寄与する可能性はある。しかし結局、幸福そのものは、この幸福が実際に生じたということは何より大切に考える或るものが存在しない限り、つまり我々の地球上での境涯を、我々自身の生や価値の一部として一旦手に入れた限りは、その後は二度とその生と価値が失われないような或るものが存在しない限り、無に等しい。最終的にはそのために我々が生きていると言えるような「子孫」は人間を超えている必要がある。我々とすべての被造物とを、我々が実際に成就した固有の深い満足感と喜び〈beauty and joy〉を永遠に育む何らかの生命が存在する必要がある。生きている限り、誰かが我々の手助けをしてくれるだろうが、死んでしまえば、誰も我々に援助の手を差し伸べられなくなる。しかし我々が現に生きてきたという事実そのものが、他の人々の役に立ち続けることは可能である。少なくとも存在しうるすべての形式の価値を正当に評価できる至高の「他者」〈Other〉、つまり宇宙のシンフォニーを取り纏める至高の指揮者、また同時に最終的な信頼のおける監査役でもある他者が存在するとすれば、そのような他者なら、巧みな技で、永遠に渡って適切な判断を下されながら、我々の一切の努力が賞賛に値する方向に導かれるようにしてくださると私は信じている。

このこと的一切から、我々が手にするものは何だろうか。我々が手にするものは、我々が生きている限り、今現在の我々の生に合理的な意味が見出せるという満足感である。天国も地獄も、今現在のこの場所に存在する。最終的な未来は、今後どのような新たな被造物が我々や我々の友人や敵が死んだ後に続こうとも、我々のものではなく、神のものである。

死は、純然たるエゴイストにとっても、偶然を否定する者にとっても、深い満足感〈beauty〉と有限性とが同一の範疇に入ることを理解できない者にとっても、また最終的には、人間を超えた宇宙的規模の、真に不滅な実在というものの存在を感じ取れない者にとっても、決して解くことのできない一つの謎である。未来をもっぱら自分中心に見る捉え方を克服し、純然たる決定論的な因果関係を否定し、有限性こそが深い満足感には不可欠なのだを受け入れること、そして超人間的で、

永続的でもある善なるものが存在すると信じて、慎ましくその方の生を高め豊かにするように生きること、この4つの方法を堅持することが、生と死の謎を解く方法である。

“The Acceptance of Death,” *Philosophical Aspects of Thanatology*, Vol. 1, ed.
Florence M. Hetzler and Austin H. Kutscher, New York: MSS Information Corporation, 1978.